



第1回 | ふじおか・ゆうき

藤岡祐機

1993年 熊本県生まれ

このコーナーでは、
毎回アール・ブリュット(※)の
作家を一人取り上げ、
滋賀県立美術館ディレクターの
保坂健二郎先生に、
ご紹介いただきます。

※アールブリュットとは、「^{なま}生の芸術」を意味するフランス語で、
評価や流行とは関係なく、「つくりたい」という衝動から
制作された独自の表現を指します。

紙とはさみを用いて

「紙とはさみと1〜2色のクレヨン
を使って何かをつくってみましょう！」
そう言われたら、あなたはどんな
ものをどのようにつくりますか？き
っと多くの人は、果物や木など何かを
かたどったうえで、つまり切り絵を
つくったうえで、そこに色を塗って
いくのではないのでしょうか。紙に色
を塗り、その紙をちぎったうえで、
^{やましたきよし}山下 清のようなちぎり絵をつくる人
もいるかもしれません。

今回紹介する藤岡祐機は、そのど
ちらとも違う手法を自ら生み出しま
した。たとえばこんなふうにも。

まず、紙の裏表それぞれの一部に
色を塗ります。表は水色、裏はピン
ク色といった感じです(写真①)。そのう
えて、長方形や、ちょっと変わった
(象に見えなくもない)形(写真②)に切り

取り、さらにその形の一部を、^{くし}櫛の
歯のように細く切っていきます。そ
の櫛の歯の幅は、1mmに満たないほ
ど。それゆえか、それとも切り方に
コツがあるのか、櫛の歯の一本一本
は螺旋状に巻くことになるのです。
するとどうなるか。くるくるとして
いる箇所では、裏側のピンク色が、
水色のうちに見えることになります。
そんな櫛の歯を、長方形の下側だけ
でなく上側にも施せば、それはもう、
「櫛のようななにか」ではなくて、
「シンプルだけれど複雑な、繊細だ
けれど構築性の感じられる美しいオ
ブジェ」となるのです。

一応断っておくと、藤岡が使うは
さみはごく普通の、数百円で買える
ような製品です。

転機は小学生のとき

実は藤岡にも、切り絵をつくって
いた時期がありました。2歳くらいの
頃から紙をちぎったりするのが好き
だった彼がはさみに出会ったのは6
歳くらいの頃。よほど相性がよかつ
たのでしょう。家の中にある紙を何
時間も切り続けるようになり、やが
てそれは、抽象的な形の切り絵と呼
べるようなものとなったのです(写
真③)。その形がとてもユニークだっ
たので、小学校2年生のときには、
熊本養護学校(現:熊本支援学校)の
先生ができあがったものを額装する
ようになります。

そして、運命のときが訪れます。
熊本市現代美術館学芸課長(当時)の
^{みなみしまひろし}南 篤 宏(故人)が同校を訪れた際
に、壁にかけてある切り絵を見て驚
き、同館の開館記念展「ATTITUDE
2002」への出品を依頼したのです。
小学生が、現代美術館の企画展に出
品作家として参加するなんて、少な
くとも私は聞いたことがありません。

両親の支え

櫛の歯状の作品をつくり始めたの
は、2001年頃、つまり小学校4年生
くらいの頃だったようです(写真④)。お
もしろいのは、制作にあるルールが
あること。柄ともいうべき部分をよ
く見てください。斜めに切り込みが
あるのがわかるでしょうか。実はこ
れ、藤岡による制作終了のしるしな
のです。集中して櫛の歯を切った後、
櫛の歯とは別の場所をぱつんと切っ
て、それでおしまい。これまで丹精
を込めて切っていたはずの「作品」
が手から離れて床に落ちるのも気に
せず、すつとどこかに行ってしまう
のです。

実は彼は自閉症です。それゆえ、
制作意図について、音声言語を介し
たコミュニケーションに基づき確認
することはできません。つまり、先
ほど私が紹介したような、いつ頃つ
くり始めたかとか、どのようにつく
っているかについては、彼とともに
暮らしてきたご両親から聞いていま
す。彼らが、息子の行為に敬意を抱
き、そこから生み出されたものを大
切に思い、きちんと保管して、展覧
会に快く貸し出したりしてくれるか
らこそ、私たちは、藤岡の創造力の
幅の広大さを感じ取ることができる
のです。そして、人間の「つくる」
という力の奥深さに思いを至らしめ
ることができるのです。この連載で
は、そんな作品を皆様に紹介してい
きたいと考えています。

保坂 健二郎 ほさか・けんじろう

滋賀県立美術館ディレクター(館長)。1976年
茨城県生まれ。慶應義塾大学大学院修士課
程修了。東京国立近代美術館主任研究員
を経て現職。著書に『アール・ブリュット アート
日本』(監修、平凡社)など。滋賀県立美術館
では「人間の才能 生み出すことと生きること」展
(2022年)を企画。



制作中の藤岡。 撮影:高橋マナミ／画像提供:(一財)日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS



机の上にはベットボトルやドレッシングボ
トルが。制作の合間には、お茶を飲んだりアイ
スを食べたりするリラックスタイムが不可欠。
一時期は、つくり始める前に、納豆に焼肉の
たれをかけたうえで一気に食べるのが習慣だ
ったこともあったよう。手前の椅子も欠かせ
ない存在で、紙を切る際、また、紙を見なが
らどう切ろうかと思案している際、それを足
で前後左右に器用に動かすのでした。



①《無題》 6.5×10.4cm 2006年頃 滋賀県立美術館蔵

黒の部分は、もとのチラシにあった色＝部分。
それが絶妙に生かされたバランスになっている、そう思いませんか？



②《無題》 7.4×11.6cm 2009〜12年頃 滋賀県立美術館蔵

櫛の歯部分の左端は「まっすぐ」だけれど右端はゆるい弧を描いています。
生きものにも見えるのはきっとそのせい。



③ 切り絵のポストカード 14.8×10cm 2003年

先が曲がっているからとじ針か？太い左は曲がってしまった杭にも見える。
太さが全然違うのは、遠近感の表現なのかも？



④《無題》 21.4×53.3cm 2001年頃 滋賀県立美術館蔵

幅53.3cmは、櫛の歯シリーズの中では最大級。
既存の紙にあるグリッドには全く沿わずに切っている。